

リンダ・マリア・バロスは一九八一年八月六日、ルーマニアの首都ブカレストで生まれた。少女期はチャウシエスクの支配する独裁共産主義のなかにあり、高校までルーマニアで過ごしたが、バカロレアに合格して渡仏、大学はフランスのパリーソルボンヌ大学（パリ第四大学）で学び、現在、同大学の博士課程でエロティシズムに関する比較文学の論文を執筆中。

二〇〇一年から現在まで、ルーマニアとフランスにおける数々の受賞歴がある。二〇〇八年にはアポリネール賞を史上最年少で受賞した。もつとも、彼女自身はアポリネールの詩をあまり好きではないそうだ。

フリリップ・ジャコテという一見地味だが素晴らしいフランス語詩人について彼女にたずねてみる。――「つまらない！平凡！」。堂々たる調べのジャック・ダラスについて彼女にたずねてみる――「つまらない！平凡！」。彼女は、生の痛みの濃い響きを詩で聞こえるようにしようとしているようだ。

彼女の指をみると、ぎざぎざのついた龍の背中のような銀色のサックがはまっている。彼女は寝付けないので睡眠薬を常用する。こんなことは直接詩の美学とは関係ないのだが、初対面だと強面こわもてのひとと勘違いする。ある種荒涼とした雰囲気をもつ彼女の詩を読んだある婦人に、「あなたはどこの橋の下にお住まいなの？」といわれた、と彼女はあきれ顔で言う。

彼女はおもにフランス語で詩を書いている。彼女の朗読を聴くと、その声に、トランシルバニアの暗い情念が吹きまきはじめのを感じる。

リンダ・マリア・バロスは故国ルーマニアとフランスの詩を双方向に翻訳し、両国の詩の交流に積極的な役割を果たしている。彼女は詩の力を信じている。その彼女にとって、詩作品は、たんに寄せ集めて詩集をつくるためのものではない。ここに訳した作品を含むアポリネール賞受賞の詩集『剃刀の刃の家』が示すように、彼女はことばによって「詩の書物」という構築物をつくろうとしている。

*

もしドアの上の横木がおまえの首を斬るなら、それは悪い徴

わたしは九旬の年の金属食器のなかで生まれた、

家がまだ壁でしかなかった頃。

わたしは盲人の国からあなた方のもとへやってきた。

だいぶまえのこと、わたしの左目は

シャツの釦のうえを流れた。

七年間わたしは歩いている、右目は

右の掌のなか。

わたしたちの国では、片目の者らが統治していた。

わたしがあとにした子供時代の国、

わたしはその国で泣いていた物置に隠れ、

洗面台の下に隠れ。

でもわたしは忘れたかつてわたしの狂気の贖金を

磨いていたあれらの物語は。

わたしはあなた方にひとつだけ言う。わたしは着きました。
ほら、ここにいます。

*

庭をよこぎり秋は砕ける

庭をよこぎり秋は砕ける。

(嗜眠症の、

老いぼれた背骨のきしむ

アスファルト、かさこそと、その下。喘いでいる。

秋はその肺にナイフをずぶりと

刺した。)

無意志症の旅行者のような、

秋の刃。

—おまえは見る、秋の刃が、道すがら森の鬣を

引っ搔き、

おまえの部屋の、壁の手首に切り傷をつけるのを、

そこでは神経症の者たちが結ばれあい

ぶつかりあい、壊しあい、歯音不全の発音

をする。

研いだ爪で、

かれらはながいあいだおまえの窓をたたく。
そして左心室から飛び去ってゆく

爆弾と喧噪と顔また顔をたずさえて

その顔はおまえの心臓の暗室で現像された顔、

そのなかにおまえはもう自分を見出しはしない、

まるで遅延の火花のなか、

斧の火花の。

おまえは二重に錠をさす。おまえは口を閉ざす。

庭をよこぎり秋は砕ける。そしてかさこそ音をたてる。

未知の詩人たちがながいあいだセーヌ河のなかを過ぎてゆく
だろう。

それから引き上げられるだろう、晩くなって、鋼の鈎竿^{かぎざお}で。

ウイリアム・クリフは一九四〇年十二月二十七日、ベルギーの町ジャンブルで生まれた。フランス語圏詩人。その著作はガリマール書店を始めとするフランスの出版社から出版されている。同性愛者で、世界を旅する詩人である。

クリフは定型詩の韻律をたくみにしのばせながら詩を書いている。たとえば伝統的な^{アレクサンドラン}十二音節より二音節多い十四音節にしてみたり、あるいは脚韻や半階音を使ったり。ただしそのフォルムは彼をがんにがらめに縛るのではなく、逆に、ながれ渦巻くことばの運動を作り出すためのものなのだ。彼は中世詩人フランソワ・ヴィヨンを好んでいるが、彼の詩にでてくる現代フランス語にはない語法が中世仏語文法を故意に使っているのか、それとも今もそれが残るベルギーのワロン語に由来するのか、判然としない。

クリフは世間のお上品なモラルにはおかまいなしの飄々とした風情で、しかし狷介な眼光を光らせながら、生の惨めさをみつめ、美をとらえ、愛の機微と傷を告げる。そしてふと転調させ苦しみをとぼけた味のおかしみに変えてみせるのだ。

クリフの朗読には、流麗にたたみかけるリズムがあり、聴く者を掬いとり運ぶ熱のこもった調べがある。

彼は二〇〇八年にリヨンのコワルスキー賞を受賞した。ここに訳出したのは『広大な存在』（二〇〇七年）からの二編。「東京」に出てくる「おじさん」とは、上智大学で教鞭をとっていた日本方言学の泰斗グロータース神父。

東京

九四年、わたしは東京へ行った

まだ生きていたおじに会いマルク・アルテンローに会った

お日様の位置をたよりに

狭い通りを歩いた

なぜって人にきいてもむだな骨折りだったから

きかれた人はにっこりしたけどそこで行き止まり

もつともあなたが地図をみてああここだとわかるような

たぶん大通りや鉄道、駅、モニュメントに

いきあたるなら話はべつ

そしてわたしは元気いっぱい何時間でも歩けた

あの大きな迷宮のなかを道がわかったり迷ったりして

ああ！ とても仕合わせだった！ いっさいがわたしの目に

は

新しい美をそなえていた太陽の

ひかりまでもが違っていた艶消しがきいていた

おなじように貧しさもそしてあのおぞましい壕^{ほり}

灰色の建物にふちどられここだったらずっと黒く

いちだんと胸くそ悪くみえたかもしれないでもあそこでは埃

と

力強いごみになんともしれない

傲慢さがあり「有能」なものに思われた

（それはどうやらわたしがなによりも好奇心から

身をまかせたどこかのだれかと愛を交わしたあとのことそれ

からひとり

わたしは地下鉄の入口を探しにいった

その界隈の道はともそっけなく酷たらしく

まわりの木々のどれひとつその恐怖をやわらげてはいなかつた)

ナントの市電

人びとは煙草を吸い人びとはコーヒーを摂り

人びとは呑み人びとはたくさん肉を食べ

殺した動物の肉を食べ

人びとは食べながらおしゃべりし人びとは腰をふって歩き

ワインをあおりながら人びとは子をつくり

眠っているあいだ人びとはからだを寄せあい

人びとは交差し人びとはそれと気づかずに

からだを寄せあい人びとは孕みはらませ

そして地上のすべての動物とおなじように

人びとは繁殖し人びとはじぶんたちの懊悩から

子を産んで解放され

それから町の歩道へ出てゆくと

市電をまつあいだ人びとはやっぱり煙草を吸う

というのも市電は人びとにはなかなかすぐにはこないものだ
人びとは市電に乗るときあわただしくなだれこむ
それから市電は出発する来たときと同じように
べつの人びとが待たせよう行きたいところへ運んでくれる
市電がやってくるのを
ナントの市電はかれらを町の外へ運ぶ
鳥たちの空気を吸いに人びとは出かける
ナントの市電といっしょに豊穡な森のなか
合法的なじぶんたちの欲求にふたたび産みの力を授けるため
に

そのあと市電といっしょに人びとはナントに戻る
かれらはそこでまた煙草を吸うだろう人びとは肉を食べるだ
ろう
そして人びとはまたしゃべるだろう人びとはワインを飲むだ
ろう
かれらはコーヒーを摂るだろうそれから人びとは
市電をもとめにゆくだろう外へ行き
鳥たちの空気を吸うために鳥たちはナントで歌っている
勝ちほこった咽喉で《広大な存在》を